



日本常用 谚语成语 辞典

主编○叶琳



南京大学出版社

H363.3-61/10

2007

日本常用 谚语成语 辞典

主 编 叶琳

副主编 李斌 汪丽影

审 校 龚智明



南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本常用谚语成语辞典 / 叶琳主编. —南京:南京大学出版社, 2007. 4

ISBN 978 - 7 - 305 - 05031 - 2

I. 日… II. 叶… III. ①日语—谚语—词典 ②日语—成语—词典 IV. H363. 3 - 64

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2007) 第 049623 号

出版者 南京大学出版社

社 址 南京市汉口路 22 号 邮编 210093

网 址 <http://press.nju.edu.cn>

出版人 左 健

书 名 日本常用谚语成语辞典

主 编 叶 琳

责任编辑 董 颖 编辑热线 025 - 83592123

照 排 南京玄武湖印刷照排中心

印 刷 丹阳兴华印刷厂

开 本 850×1168 1/32 印张 18.375 字数 529 千字

版 次 2007 年 4 月第 1 版 2007 年 4 月第 1 次印刷

ISBN 978 - 7 - 305 - 05031 - 2

定 价 33.00 元

发行热线 025 - 83594756

电子邮件 sales@press.nju.edu.cn(销售部)
nupress1@public1.ptt.js.cn

* 版权所有,侵权必究

* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购
图书销售部门联系调换

前　　言

日语和汉语一样,有大量的成语故事和谚语。准确掌握和使用这些成语典故和谚语,有利于增添语言的趣味性和语言的艺术感染力,有利于提高学习者对所学、所用语言的运用能力。尽管日语中有大量的汉语词汇,在表达成语故事和谚语方面,很多说法看上去都大相径庭,但实际的含义却一样。尤其是在成语方面,尽管中日都有四字熟语,但在表现上确有一定的差异性。因此,这本《日本常用谚语成语辞典》,特将日语中常用的“四字熟语”进行了单独排列。从总体上来说,该书不仅有助于广大日语使用者提高语言表达能力,同时还有利于他们了解并正确区分中日两国语言上的异同。

本书除了适用于有一定基础的日语学习爱好者以外,还可成为日语专业的学习者、从事日语教学和翻译工作的教师、翻译人员必备的参考书。

为了便于使用者查找词条的方便,本书是严格按照日语五十音图的发音顺序进行排列的。在参考了不少日本相关的同类辞书的基础上,共收集了3300余条谚语和成语故事。我们在编写的过程中,对主要的条目都加以适当的举例说明,同时对重要的成语故事加以追本溯源、博采书证,将它们的出典一一注明。而且,为了便于使用者对词义的理解,我们对所列举的每一个词条、例句、成语出典都翻译成了中文。同时为了便于学习爱好者扩大单词量,掌握准确的读音,激发其学习的热情,我们还对句中出现的所有日语汉字都标注上了假名。

本辞典的编写人员为南京大学日语系的部分教师(李斌、汪丽影、吕斌、朱圆圆、庄倩、叶琳等)、南京国际关系学院的刘军老师、三江学院日语系的沈俊老师和日语专业的部分研究生(丁晓伟、蒋俊俊、杨波、刘素桂、王莉等)。在本辞典的

编写过程中,我们得到了南京大学日本专家小西久美子、早川正恭等老师的热情指教。南京国际关系学院龚智明教授为全书的审阅付出了艰辛的劳动。南京大学出版社的董颖女士为了该书的顺利出版提供了极大的便利,在此对他们劳动的付出表示诚挚的感谢。

由于编写者水平有限,特别是对许多谚语进行大胆创译的过程中,诸种错误的出现实属难免,在此恳请广大的使用者给予斧正。

编 者

2007年4月于南京大学

凡例

1. 本辞典共收录了日本常用的谚语和成语 3 300 余条，主要的条目还配以适当的举例说明以及成语故事的出典。
2. 本辞典的编排严格按照日语五十音图的发音顺序，便于使用者查找。
3. 本书中的条目都配有日文含义的解释和中文的简单释义，基本上包括以下几个内容：意义、例句、出典原文。条目后面出现的“=”表示同义语；“⇒”表示近义语或类义语；“↔”表示反义语。每一个条目中的“//”后是本词条的中文释义，“()”表示出典，“()”表示该句的中文翻译。另外，每一个日语条目完整的语言表达方式是使用句号分隔开的；中文多重含义的解释是使用分号分隔开的。

例如：p103

騎虎の勢い

○虎に乗った者が、途中でおりることができないように、物事にはずみがついて、途中やめられない、激しい勢いを言う。成り行きに任せると意にも使われる/騎虎の勢い

●一回戦に大勝し、優勝戦まで騎虎の勢いで勝ち進んだ(在第一场比赛中大胜，此后就以骑虎之势打入了决赛。)

(隋書・獨孤皇后伝)周の宣帝崩するに当たり、高祖入りて禁中に居り、百揆をす。総ぶ。後人をして高祖に謂わしめて曰く、「大事已に然り、騎虎の勢い、下るを得ず。之を勉めよ」と(当周宣帝崩，高祖入居禁中，综百揆，后使人谓高祖曰：“大事已然，骑虎之势，不得下。勉之”。)

○表示意义，●表示例句，■表示出典原文。

4. 本辞典中所有词条、例句、成语出典都配有中文译文，同时句中所有的日语汉字都注有假名，便于使用者学习。

目 录

一、諺語、成语

あ	1					
あいおお	にく	いた					
愛多ければ憎み至る	1	あ	だる	ねと	たか	
あい	あく	し	空き樽は音が高い	3		
愛してその悪を知る	1	あきな	さんわん			
あい	じゅう	わす	商い三年	4		
愛してその醜を忘る	1	あきな	うし	よだれ		
あい	み	はなかけ	商いは牛の涎	4		
愛して見れば鼻欠もえくぼ	1	あきな	くさ	たね		
あいそ	つ	は	商いは草の種	4		
愛想もこそも尽き果てる	1	あきな	もと			
あ	くち	ふさ	商いは本にあり	4		
開いた口が塞がらない	2	あきな	ナビヨメ	く		
あ	くち	ばたもち	秋茄子嫁に食わすな	4		
開いた口へ牡丹餅	2	あき	おうぎ			
あいて	か	ぬしか	秋の扇	4		
相手変われど主変わらず	2	あき	しか	ふえ	よ	
あいて	な	けんか	秋の鹿は笛に寄る	4		
相手の無い喧嘩はできぬ	2	あき	そら	ななたびんか		
あ	わか	はじ	秋の空は七度半変わる	4		
会うは別れの始め	2	あき	ひ	つるべ	お	
あうん	こ	きゅう	秋の日は釣瓶落とし	5		
阿吽の呼吸	2	あきんど	けいす			
あお	てん	は	商人に糸団なし	5		
仰いで天に愧じず	2	あくじせんり	はし			
あお	まなこ		悪事千里を走る	5		
青き眼	2	あくじみ				
あおな	しお		悪事身にかえる	5		
青菜に塩	3	あくじょ	ふかなさ			
あお	あい	い	悪女の深情け	5		
青は藍より出でて藍よりも青し	3	あくせんみ				
あが	と		悪銭身につかず	5		
足掻きが取れない	3	あくない	つ			
あか	こす	で	悪態を吐く	5		
垢は擦るほど出るあらは探すほ	さが		あくつよ	せん	つよ		
で	ど出る	悪に強ければ善にも強し	5		
あきたか	うま	こ	あ	せんす	せん		
秋高く馬肥ゆ	3	上げ膳据え膳	6		
			あ	ひ	く		
			明けた日は暮れる	6		

あ 開けて悔しき玉手箱	くや たまてばこ	6	あす 明日は明日の風が吹く	かぜ ふ	9
あ 明けても暮れても	く	6	あす 明日は我が身	み	9
あご 顎で背中を搔くよう	せなか か	6	あすまおこ 東男に京女	きょうねんな さいわ	10
あご 顎で蟻を追う	はえ お	6	あた 与えるは受けるより幸いなり	う さいわ	10
あさ 浅い川も深く渡れ	かわ わな	6	あくだ 当たって碎けよ	くだ	10
あさがお 朝顔の花一時	はなひととき	6	あたまかく 頭隠して尻隠さず	しりかく	10
あさせ 朝題目に夕念佛	あだなみ	6	あたま 頭の上の蠅も追われぬ	しり お	10
あさ 浅瀬に仇浪	うねんぶつ	7	あたま 頭の上の蠅を追え	うえ お	10
あさだいもく 朝題目に夕念佛	ゆうねんぶつ	7	あたまは 頭禿げても浮気はやまぬ	うねき うわき	11
あさ 麻の中の蓬	なか よもぎ	7	あたら 新しい酒は新しい革袋に	さけ かわぶくろ	11
あした 朝に紅顔あって夕べに白骨と	こうがん ゆう	はつこつ	あた 中らざと雖も遠からず	いえど とお	11
なる		7	あ 当たるも八卦當たらぬも八卦	はっけ はっけ	11
あした 朝に道を聞かば夕べに死すとも	みち き	ゆう し	あ 当たるを幸い	さいわ	11
か 可なり		7	あ あちら立てればこちらが立たぬ	た た	11
あした 朝に夕べを謀らず	ゆう はか	7	あつか 悪貨は良貨を駆逐する	りょうか くちく	11
あした 朝に夕べを慮られず	ゆう はか	7	あつかん 圧巻	さむ ひがん	11
あした 明日は明日の風が吹く	あした かぜ	ふ	あつ 暑さ寒さも彼岸まで	わす ひがん	12
あしたゆう 朝夕べに及ばず	およ	8	あつ 暑さ忘れれば陰忘れる	わす かげわす	12
あし 足の裏の飯粒	うら めしふ	8	あ 会ったときは笠を脱げ	かさ ぬ	12
あしもと 足下から鳥が立つ	とり た	8	あ 有つても苦勞無くても苦勞	くろう くろう	12
あしもと 足下にも及ばない	およ	8	あつ 集めて大成す	たいせい	12
あしもと 足下を見られる	み	8	あつもの 羹に懲りて膾を吹く	こ なます ふ	12
あし 足を知らずして履を為る	し	くつ つく	あ 当て事は向こうから外れる	こと はず	12
あす 明日ありと思う心の仇桜	おも こころ	あだぎくら	あとあし 後足で砂をかける	すな かづく	12
あすかがわ 飛鳥川の淵瀬	ふらせ		あと 後にも先にも	さき	13
あすし 明日知らぬ身	み		あと 後の雁が先になる	かり さき	13
あすし 明日知らぬ世	よ		あと 後の喧嘩先でする	けんかさき	13
あす 明日のことは明日案じよ	あすあん				
あす 明日の百より今日の五十	ひやく	きょう ごじゅう			

あと まつ		
後の祭り	13
あと の やま		
後は野となれ山となれ	13
あとばら や		
後腹が病める	13
あど う		
あとを打つ	13
あな はい		
穴があつたら入りたい	13
あぱた えくは		
痘痕も笑窪	14
あぶ はし いちどわな		
危ない橋も一度渡れ	14
あぶ はし わな		
危ない橋を渡る	14
あぶはちと		
虻蜂取らず	14
あぶら き		
油が切れる	14
あぶらがみ ひ つ		
油紙に火が付いたよう	14
みず あぶら		
水と油	14
あぶら そそ		
油を注ぐ	15
あほう ひと おぼ		
阿呆の一つ覚え	15
あま しる す		
甘い汁を吸う	15
あま もの あり つ		
甘い物に蟻か付く	15
あまだ いし うが		
雨垂れ石を穿つ	15
あみ さかな		
網にかかった魚	15
あめは かさ わす		
雨晴れて傘を忘れる	15
あめふ じかた		
雨降って地固まる	15
あめ ふ やり ふ		
雨が降ろうと槍が降ろうと	16
あめ ふ ひ てんき わる		
雨の降る日は天気が悪い	16
あやま あらた はほか		
過って改むるに憚ることな		
かれ	16
あやま あらた あやま		
過ちを改めざるこれを過ちと		
いう	16
あやま み じん し		
過ちを観て仁を知る	16
あらし まえ しづ		
嵐の前の静けさ	16
あり だいぶつ ひ		
蟻が大仏を曳くよう	17
あり とう く こと		
蟻が塔を組む如し	17
あり あな つつみ くず		
蟻の穴から堤も崩れる	17
あり あま こと		
蟻の甘きにつく如し	17
あり おり てん のば		
蟻の思いも天に昇る	17
あり くま のまい		
蟻の熊野参り	17
あり は で すき な		
蟻の這い出る隙も無い	17
あり は み		
蟻の這うまで見える	18
あ こと な こと		
有る事無い事	18
あるときめし		
ある時の米の飯	18
あ とき あり な とき なし		
有る時は蟻があり、無い時は梨も		
なし	18
あ ときばら さいそく		
有る時払いの催促なし	18
あ もの はな もの		
合わせ物は離れ物	18
あわ こじき らら たく		
慌てる乞食は貴いが少ない	18
あわひとづぶ あせひとづぶ		
粟一粒は汗一粒	19
あわび かたおも		
飽の片思い	19
あわ く		
泡を食う	19
あんこう ま ぐ		
鮫の待ち食い	19
あんじょうひと あん かうま		
鞍上 人なく鞍下馬なし	19
あん う やす		
産するより生むが易い	19
あんま めがね		
按摩に眼鏡	19
あんま たかけ た		
按摩の高下駄	19
あんや つぶて		
暗夜の礫	20
あんや ともしひ		
暗夜の灯火	20

い

21

威あって猛からず	たけ	21	石の上にも三年	うえ さんねん	24
いいようにする	い	21	いしばし 石橋を叩いて渡る	たたかわ わた	25
言うに言われぬ	い	21	いしゃ 医者の不養生	ふようじょう	25
言うは易く行なうは難し	い やす おこ かな	21	いしくた 衣食足りて榮辱を知る	えいじょく し	25
言うも愚か	い わろ	21	いしだ 石を抱いて淵に入る	ふち い	25
家給し人足る	いえきゅう ひとた	21	いすか 鳥の嘴	あやめ かきつばた	25
家貧しくして孝子顕る	いえまづ こうしあらわ	22	いすれ菖蒲か 杜若	かきつばた じよく	25
家貧しくして良妻と思う	いえまづ りょうさい おも	22	いす み 何を見ても山家育ち	やまとそだ	26
怒りは敵と思え	いか てき おも	22	いそ 急がば回れ	まわ	26
生き馬の目を抜く	いうま めぬ	22	いた 痛くもない腹を探られる	はら さく	26
行きかけの駄賃	い だらん	22	いたごいまいした 板子一枚下は地獄	じごく	26
生き身は死に身	いみ しみ	22	いただい もの なつ こそで	戴く物は夏も小袖	26
衣錦の栄	いきん えい	22	いちじ ほんじ	一事が万事	26
戦を見て矢を矧ぐ	いくさ み やは	22	いたち さいご へ	鼬の最後つ屁	26
生簀の鯉	い こい	23	いたち な ま てんほこ	鼬の無き間の貌誇り	26
委細構わず	いさきのかま	23	いたち みわき	鼬の道切り	27
異彩を放つ	いはな	23	いだてん	韋馱天	27
鎌倉	かまくら	23	いちお にかねさんわとこ	一押し二金三男	27
石が流れて木の葉が沈む	いし なが こは しづ	23	いち ぱち	一か八か	27
石に灸	いし きゆう	23	いちぎ わよ	一議に及ばず	27
石に漱ぎ流れに枕す	いし くちすす なが まくら	23	いちくめん にばたら	一工面ニ働き	27
石に立つ矢	いし たて や	24	いちじ ほんじ	一事が万事	27
石に花咲く	いし はなさ	24	いちじつこれ あたた	じゅうじつこれ ひや	
石に布団は着せられず	いし ふとん き	24	いちじつ けい あさ	一日之を暴めて十日之を寒す	28
石に枕し流れに漱ぐ	いし まくら なが くちすす	24	いちじつ けい あさ	一日の計は朝に在り	28
せいしんいつとうなにごとな	せいしんいつとうな	24	いちじ し	一字の師	28
精神一到何事か成らざん	せいじんいつとうなにごとな	24			

いちじ めいりゅう 一時の名流	28	いつしみだ 一糸乱れず	32
いちじゅ かれいちが なが たしょう えん 一樹の陰一河の流れも他生の縁		いつしょうこう な ばんこつか 一将功成て万骨枯る	32
	28	いつしょう ふ 一笑に付する	33
いちじょう しゅんむ 一場の春夢	28	いつすんきき やみ 一寸先は闇	33
いちなんさ いちなん 一難去ってまた一難	29	いつすんのが 一寸逃れ	33
いち かんびょう にくすり 一に看病二に薬	29	いつすん こういんから 一寸の光陰軽んずべからず	33
いち とら 市に虎あり	29	いつすん の ひろの 一寸延びれば尋延びる	33
いちねんてん つう 一念天に通ず	29	いつすん もし ごぶ たましい 一寸の虫にも五分の魂	33
いち うら ろく 一の裏は六	29	いつせん わら もの いつせん な 一錢を笑う者は一錢に泣く	33
いちひ にさきんがくもん 一引き二才三学問	29	いつせんかんきょう 一旦緩急あれば	33
いちひめに たろう 一姫二太郎	30	いつていてじ し 一丁字を識らず	34
いち に 一も二もなく	30	いつとうち め 一頭地を抜く	34
いちみやくあいつう 一脈相通じる	30	いつぱいち まみ 一敗地に塗る	34
いちもんお ひやくし 一文借しみの百知らず	30	いつぱせんきん ひ 一髪千鈞を引く	34
いちもん 一文にもならない	30	いつぱ うご ばんばしたが 一波わざかに動いて万波隨う	34
いちとうお てんか あき し 一葉落ちて天下の秋を知る	30	いつぱん み せんじょう ほく 一斑を見て全豹をトす	34
いかり おこ いちがい のぞ し 一利を興すは一害を除くに如		いつび げん 溢美の言	35
かず 一を聞いて十を知る	30	いつぶかん あ ばんぶ ひら 一夫閥に当たれば万夫も開く	
いち し に し 一を識りて二を知らず	31	なし なし	35
いち な 市を成す	31	いっぽんやり 一本槍	35
いつかげん 一家言	31	いつまでもあるとは思うな親 おも おや かね と金	35
いつきよしひつとうそく 一擧手一投足	31	やなぎ した どじょう いつも柳の下に泥鮎はいない	
いつけんかげ ほ ひやけんこえ 一犬影に吠ゆれば百犬声に		いつ もつ ろう ま 佚を以て勞を待つ	35
ほ 吠ゆ	32	い た い 居ても立っても居られない	36
いつけんきゅう ごと 一見旧の如し	32	いぬ にしむ お ひかし 犬が西向きや尾は東	36
いつごく あらそ 一刻を争う	32	いぬ さる 犬と猿	36
いつし 一糸まとわす	32		

いぬ ろんご 犬に論語	36	さんばい いやいや三杯	40
いぬ とおぼ 犬の遠吠え	36	いりまめ はな 炒豆に花	40
けんぱ ろう と 犬馬の労を取る	36	い か た か 入れ替わり立ち替わり	40
いぬほね お たか えじき 犬骨折って鷹の餌食になる	36	いろ け く け 色気より食い気	40
いぬ ある ほう あ 犬も歩けば棒に当たる	36	いろ 色とりどり	41
いぬ く 犬も食わない	37	いろ しろ しじなんかく 色の白いは七難隠す	41
いぬ ほうばいたか ほうばい 犬も朋輩鷹も朋輩	37	いろ し あん ほか 色は思案の外	41
いのち ものだね 命 あっての物种	37	いろめ つか 色目を使う	41
いのち にはんめ 命 から二番目	37	いわ い 曰く言いがたし	41
いのちなか ほじおお 命 長ければ恥多し	37	いわあみ くじら と 鰐網で鯨を撮る	41
いのち す たから 命 に過ぎたる宝なし	37	いわし しうじんお 鰐で精進落ち	41
いのち およ 命 の親	37	いわし かしら しんじん 鰐の頭も信心から	42
いのち せんたく 命 の洗濯	38	い し 言わずと知れた	42
いのち きわ 命 の際	38	い はな 言わぬが花	42
いのち つな 命 の綱	38	い い まさ 言わぬは言うに勝る	42
いのち ひろ 命 を拾う	38	い もつ い せい 夷を以て夷を制す	42
いのち ほう ふ 命 を棒に振る	38	いんえい と 陰影に富む	42
い なか かわす 井の中の蛙	38	いんが おぐるま 因果の小車	43
い なか かわすないかい し 井の中の 蛙大海を知らず	38	いんが たね やど 因果の胤を宿す	43
いの かせ 祈るより稼げ	39	いんかんとお 殷鑑遠からず	43
いはら なか さんねん 茨の中にも三年	39	いんこう ち 咽喉の地	43
いま いま 今か今かと	39	いんすう そろ 員数を揃える	43
いまな からす わら 今鳴いた鳥がもう笑う	39	いんとう ようはう 陰徳あれば陽報あり	43
いも しき 芋づる式	39	いんそな 員に備わるのみ	43
いも に ぞんじ 芋の煮えたもご存知ない	39	いん よう 陰に陽に	44
いも あら 芋を洗うよう	39	いんねん つ 因縁を付ける	44
いもん ほう 依門の望	40		

う	45
う　うわさ 浮いた噂	45
う　いてんへん　よ　なら 有為転変は世の習い	45
う　しょく　えら 飢えては食を選ばず	45
うえ　うえ 上には上がある	45
うえ　した　おねさわ 上を下への大騒ぎ	45
うえ　み　ほうず 上を見れば方図がない	45
うおごころ　あ　みずごろ 魚心有れば水心	46
うお　き　のば　ごと 魚の木に登る如し	46
うお　ふらう　あそ　ごと 魚の釜中に遊ぶが如し	46
うお　みず　え 魚の水を得たよう	46
うお　え　せん　わす 魚を得て筌を忘る	46
うぐいす　な 鶯 鳴かせたこともある	46
う　け　い 有卦に入る	47
う　こう　しう 鳥合の衆	47
うご　と 動きが取れない	47
う　こ　だいのこ 雨後の筈	47
うさぎ　わな　きつね　か 兎の罠に狐が掛かる	47
うさぎ　なのか　か　つ 兎も七日なぶれば嘴み付く	47
うしお　うし　お 牛追い牛に追われる	47
うじな　たま　こし 氏無くて玉の輿	48
うし　うま　の　か 牛に馬を乗り換える	48
うし　ない　こと　だん 牛に対して琴を弾ず	48
うし　ひ　せんこう　じ　まい 牛に引かれて善光寺参り	48
うし　あゆ 牛の歩み	48
うし　つの　つ　あ 牛の角付き合い	48
うし　うし　づ　うま　づ 牛は牛連れ馬は馬連れ	48
うし　せん　り　うま　せん　り 牛も千里馬も千里	49
うじ　そだ 氏より育ち	49
うし　ゆび　き 後ろ指を指される	49
うし　うま　の　か 牛を馬に乗り換える	49
うし　く　き 牛を食らうの氣	49
うそ　で　まこと 嘘から出た眞	49
うそ　どろぼう　はじ 嘘つきは泥棒の始まり	50
うそ　ぼう　ず　あだま 嘘と坊主の頭はゆったことが	
ない	50
うそ　かわ　は 嘘の皮が剥がされる	50
うははひやく　なら 嘘八百を並べる	50
うそ　ほう　べん 嘘も方便	50
う　な 打たねば鳴らぬ	50
うた　よ　つ　よ　うた　つ 歌は世に連れ世は歌に連れ	50
うちかぶと　み　す 内兜を見透かす	51
うちへんけい 内弁慶	51
うちなごうやく 内股膏薬をやる	51
うちょうてん 有頂天	51
うつつ 現をぬかす	51
う　いちがん 打って一丸となる	51
うつ　か　よ　なら 移れば変わる世の習い	51
うでいいまんすねいめん 腕一本脛一本	51
う　ど　たいほく 独活の大木	52
うなぎのは 鰻登り	52
うねは　かさけ　もの 自惚れと瘡氣のない者はない	52
う　け 兎の毛でついたほど	52

うまね	からすみす	おほ	うめのぞ	かわと	梅を望んで渴きを止む	55
うの			うぎはな	さ	埋もれ木に花が咲く	55
鶴呑みにする			うらおもて		うらおもて裏表がない	55
うめたかめ			うら	うら	裏には裏がある	56
鶴の目鷹の目			うら	うら	裏の裏を行く	56
うまものよいく			うら	こづかい	うらこづかいい怨み骨髓に入る	56
美味しい物は宵に食え			うら	ほう	うらほうとくもつ怨みに報ずるに徳を以てす	56
うまのひとそ			うらめ	で	うらめで裏目に出る	56
馬には乗ってみよ人には添うて			うら		うら裏をかく	56
みよ			うりことば	かことば	うりことばかことば売り言葉に買い言葉	56
うませわ			うりつめ	つめ	うりつめ瓜に爪あり爪に爪なし	57
馬の背を分ける			うりつる	ななび	うりつる瓜の蔓に茄子はならぬ	57
うまみみねんぶつ			うりふた		うりふた瓜二つ	57
馬の耳に念佛			うわさ	かげ	うわさかげ噂をすれば影	57
うあとはやはぐすり			うんひら		うんひら運が開ける	57
生まれた後の早め薬			ううこ	だこ	ううこ生んだ子より抱いた子	57
うまうしのか			うるもの	つぶ	うのものつぶ腫んだ物は潰せ	57
馬を牛に乗り換える			うんでいさ		うんでいさ雲泥の差	58
うましか			うんとも	すんとも	うんともすんとも	58
馬を鹿にとおす			うんつ		うんつ運の尽き	58
うまみずべつとい			うんてん		うんてん運は天にあり	58
馬を水辺に連れて行くことはできる			うんねま		うんねま運は寝て待て	58
みずの						
が、水を飲ませることはできない						
うわやそぞおや						
生みの親より育ての親						
うみものやまもの						
海の物と山の物ともつかない						
うみやす						
海を山にする						
うむあいづ						
有無相通す						
うむい						
有無を言わせず						
うめさくら						
梅と桜						
うめうぐいす						
梅に鶯						
え						
えいがはな						
栄華の花			え	かしこ	えたり賢し	59
えいゆういろこの			えだか		えだか枝を交わす	59
英雄色を好む			えだき	ねか	えだきねか枝を切って根を枯らす	59
えきしゃみうえし			えだな		えだな枝を鳴らさず	59
易者身の上知らず						
えだかねのこ						
枝は枯れても根は残る						

えて ほ あ 得手に帆を揚ぐ	59	えんか こしつ 煙霞の痼疾	61
えど こ さつき こい ふきなが 江戸っ子は皐月の鯉の吹流し	60	えんじやくいしく こうこく こころざし し 燕雀安んぞ鴻鵠の志を知	
えど こ よいご ゼに つか 江戸っ子は宵越しの錢は使わぬ	60	らんや 61	
えど かたき ながさき う 江戸の敵は長崎で討つ	60	えんすいきんか すく 遠水近火を救わず	61
え か ちか 絵に描いた餅	60	えん うきよ すえ ま 縁と浮世は末を得て	61
え かろ え 柄のない所に柄をすぐる	60	えん したじ ちからも 縁の下の力持ち	61
えび ない つ 蝦で鯛を釣る	60	えん しなまい 縁の下の舞	62
えよう ちか かわ 栄耀の餅の皮	60	えん い 縁は異なるもの	62
えんおう ちぎ 鶯鶯の契り	60	えんりょ きんゆう 遠慮なければ近憂あり	62

お 63

いえ いちだいじ お家の一大事	63	おお いえ おお かぜ 大きな家には大きな風	65
お う 追い討ちをかける	63	おお せわ 大きな世話だ	65
いえけい お家芸	63	おお めあ 大きな目に遭う	65
お き はな 老い木に花	63	おおさか く だお きょう きだね 大阪の食い倒れ 京の着倒れ	65
おひいて は あ 追風に帆を揚げる	63	おおなた ふ 大鉈を振るう	65
お きりん どば おと 老いては麒麟も駄馬に劣る	63	おおぶ ろしき ひろ 大風呂敷を広げる	66
お こ したが 老いては子に従え	64	おか あ かつぱ 陸に上がった河童	66
お さか 老いてはますます壯なるべし	64	お はんじょうね いちじょう 起きて半畳寝て一畳	66
お いいてつ 老いの一徹	64	おき いそ はな 沖にもつかず磯にも離る	66
お こい 老いらくの恋	64	おき こ 沖を越える	66
おうせつ いとま 応接に暇あらず	64	おくう あい 屋鳥の愛	66
お こ だ こ 負うた子より抱く子	64	おくじょうおく か 屋上屋を架す	66
おう むがえ 鸚鵡返し	64	おくば きぬ き 奥歯に衣を着せる	67
おおかぜ ふ 大風の吹いたあと	65	おくば もの はさ 奥歯に物が挟まる	67
おおおとこそうみ ちえ まわ 大男 総身に知恵が回りかね	65	おくび だ おくびにも出さない	67
おお やかん わ おそ 大きい薬缶は沸きが遅い	65	おくぼう じか せ 臆病の自火に責められる	67

おくめん 臆面もなく	67	おに からねんにつ 鬼の空念仏	71
ことば あま お言葉に甘えて	67	おに くび 鬼の首を取ったよう	71
おこり お 瘤が落ちる	67	おに め なみだ 鬼の目にも涙	71
わご ひさ 驕るものは久しからず	68	お ひれ 尾に鱗をつける	71
さと し お里が知れる	68	おに じゅうはわばんちや でほな 鬼も十八番茶も出花	72
わし まな なか 教うるは学ぶの半ば	68	おに す く 鬼を酢にして食う	72
お えん つい 押しつけられた縁は続かぬ	68	おのれ はつ ところ ひと はどこ 己の欲せざる所は人に施すこ なか と勿れ	72
しゃかさま き つ お釂迦様でも気が付くまい	68	おはう か 尾羽打ち枯らす	72
しゃかさま し お釂迦様でも知るまい	68	おび みじか たすき なが 常に短し襷に長し	72
おじやんになる	69	おべつかを使う	72
だいもく とな お題目を唱える	69	ねね もの わら つか 溺れる者は藁をも摑む	72
たか お高くとまる	69	まえひらく くじゅうく お前百までわしや九十九まで	73
ため お為ごかし	69	おも うち いろそと あらわ 思い内にあれば色外に現る	73
あ おだを上げる	69	おも た きちじつ 思い立ったが吉日	73
おだわらひょうじょう 小田原評定	69	おも なか す 思い半ばに過ぎる	73
お むしゃ すすき ほ お 落ち武者は薄の穂に怖じる	69	おも い はら 思うこと言わねば腹ふくる	73
お おな たにかわ みす 落ちれば同じ谷川の水	70	おも ねんりきいわ とお 思う念力岩をも通す	73
おとこごころ あきそら 男心と秋の空	70	おも おも 思えば思われる	73
おとこ どきょう おんな あいきょう 男は度胸、女は愛嬌	70	おやおも こころ 親思う心にまさる親心	73
おとこ うじ おんな 男 やもめに蛆がわき、女 やもめ	70	おや し しょくやす 親が死んでも食休み	74
はな さ に花が咲く	70	おやかたおも しきだお 親方思いの主倒し	74
おな あな むじな 同じ穴の貉	70	おやかたひ まる 親方日の丸	74
おな かま めし く 同じ釜の飯を食う	70	おやこ なか きんせん たにん 親子の仲でも金錢は他人	74
おに で じや で 鬼が出るか蛇が出るか	70	おやこ いっせ 親子は一世	74
おに わら 鬼が笑う	70	やす こよう お安い御用	74
おに かなばう 鬼に金棒	70	おや つきよ 親と月夜はいつもよい	74
おに いま せんたく 鬼の居間に洗濯	71	おや に おにこ 親に似ぬ子は鬼子	74
おに かくらん 鬼の霍乱	71		

おや いっけん なす はな せん ひと 親の意見と茄子の花は千に一つ	75	およ こい たきのま 及ばぬ鯉の滝登り	76
もむだはない	75	およ つ 及びも付かない	76
おや いんが こ むく 親の因果が子に報いる	75	おろ もの ふく 愚か者に福あり	76
おや こころ こし 親の心 子知らず	75	お オバ 終わりよければ総てよし	76
おや すね かじ 親の瞼を齧る	75	おぶ いぬ なた 尾を振る犬は叩かれず	76
おや ななひか 親の七光り	75	おんなさか うし う そこ 女賢しゆうて牛を売り損なう	77
おや よくめ 親の欲目	75	おんなさんいん かしま 女三人あれば姦しい	77
おや おや こ こ 親は親なら子も子	75	おんな かみ け 女の髪の毛には大象も繋がる	77
おやはか こばか 親馬鹿子馬鹿	75	おんな さんかい いえ 女は三界に家なし	77
おや な こ そだ 親は無くても子は育つ	76	おん はら き なさ はら 恩の腹は切らねど情けの腹は	
やまと たいしう お山の大将	76	き 切る	77
およ じょう ず かわ し 泳ぎ上手は川で死ぬ	76	おん あだ かえ 恩を仇で返す	77
か	78		
か いめ て か 飼い犬に手を噛まれる	78	かえる つら みぎ 蛙の面に水	80
かいがる うみ はか 貝殻で海を測る	78	かかい さりょう えら 河海は細流を選ばず	80
かいいけい はじ 会稽の恥	78	かきかた いめい 垣堅くして犬入らず	80
かいこつ こ 骸骨を乞う	78	かぎ あな てん のぞ 鍵の穴から天を覗く	80
かいせい ゆう 蓋世の雄	78	がき め みずみ 餓鬼の目に水見えず	81
かいだたま な 咳唾玉を成す	79	がき にんずう 餓鬼も人數	81
か もの もの い 書いた物が物を言う	79	かぎゅうかくじょう あらそ 蝸牛角上の争い	81
かいとうなん ま な 快刀乱麻を断つ	79	がくしゃ と てんか 学者の取った天下なし	81
かい さんねんろ みつき 權は三年船は三月	79	かく あらわ 隠すより現れる	81
かい はじ 隗より始めよ	79	かくせい かん 隔世の感	81
かいろく わざわ 回禄の災い	79	がくも な し 学若し成らずんば死すとも帰	
か らら まさ 買うは賣うに勝る	80	らす がくもん けいける けいけん がくもん 学問なき経験は経験なき学問に	
か ぎ は ぎ 替え着なしの晴れ着なし	80	まさ 優る	82
かえる こ かえる 蛙の子は蛙	80		